

## 「兼好自撰家集」秀歌評釈

稲田利徳

「徒然草」の著者に自撰家集のあることは広く知られているが、「徒然草」に比較してはるかに研究者の関心が低くて、関連論文も微々たるものである。

しかし、「兼好自撰家集」を「徒然草」の世界を念頭において読むと、兼好の苦悩や本音が吐露されていて実に興味深い。その味は、同じ和歌四天王の頼阿や慶運の和歌とは違い、詞書を含めて読むと、しみじみと彼の人間性に触れることができるところにある。その点、「兼好自撰家集」は「徒然草」理解の補助的な資料にとどまるものではなく、一人の人間の心情の軌跡を示すものとしての位置を与えられてよい。

ところで、いざ秀歌を選ぶとなると、特別にこれこそはと目を引くものは少ない。そこで、ここでは詞書を含めて味わい深いものを選んで評釈を行ってみたい。

「兼好自撰家集」に対しては、早く、富倉二郎氏が全歌にわたって簡単な評釈を施しているが（『兼好法師研究』東洋閣・昭12）、これは「兼好自撰家集」の評釈としての嚆矢であった。さらに富倉氏はその成果をもとに、簡潔な頭注として『類纂徒然草』（開文社・昭31）にまとめられた。また、川瀬一馬氏も『徒然草』（新註国文学叢書・講談社・昭25）の末尾に頭注を付して家集をおさめている。そこで、主として、この三つを随時参照してゆき、各々、富倉評釈、富倉頭注、川瀬頭注と略称する。

また、ごく最近、斎藤彰氏が「兼好自撰家集註釈」を「国文学研究稿」に連載を開始され、現在、三号で二十五首まで註釈されている。これは非常に詳細な註釈で、その完結がまたれるが、私はそれとは別途に、秀歌選という姿勢で評釈を試みたい。

なお、底本は兼好の自筆稿本とされる、尊経閣文庫蔵「兼好自撰家集」を翻刻した『私家集大成中世Ⅲ』により、適宜、濁点を施す。歌の下の数字は『私家集大成』の通し番号である。

(いし山にまうづとて、あけぼのにあふさかをこえしに)

(1) あふさかの関ふきこゆる風のうへにゆくゑもしらずちるさくらかな

(三)

詞書によるとこの歌は、作者が滋賀県大津にある石山寺に参詣の途中、逢坂を越えたときに、

雲のいろにわかれもゆくかあふさかのせきぢの花のあけぼの、そら

(二)

とともによんだものである。

逢坂は三関の一つとして、また、古来、歌枕として著名な関所だったので、曙に風に吹かれて散ってゆく桜の花は、ひとしお作者の心情をゆきふったものと思われる。

歌は逢坂の関を吹き越えてくる風に、桜の花びらが、いずくとももなく散り去ってゆく光景である。逢坂という著名な歌枕で、薄明るくなつた空に、まるで幻影のように白い花びらが飛び散ってゆくのに心をひかれたのであろう。

この歌の本歌としては、

風のうへにありかさだめぬちりの身はゆくゑもしらずなりぬべら也

(読人しらず・古今集・雑下・九八九)

が浮かぶが、(1)の歌はこの本歌から、「風のうへに」と「ゆくゑもしらず」をとり、落花を惜しむ心に変えている。

なお「ふきこえる」の「こえる」は、逢坂の関の縁語になっており、「あふ」と「ちる」は対立語である。「関ふきこゆる」の表現をとりこんだ歌には、

秋風のせき吹きこゆるたびごとにこゑ打そふるすまのうらなみ

(壬生忠見・新古今集・雑中・一五九七)

に先蹤がある。

(1)の歌の主題は、散るだけでも惜しいのに、その散つた花びらまでが、風によってゆく方知らずに吹き飛ばされる落花への愛惜にあ

るだろうが、一方、見方を変えれば、逢坂の曙の落花の光景を美的にとらえたともいえるのである。

ふかくさにかよひしころ、あか月きぬたうつそ

(2) ころもうつさむの袖やしほらんあか月露のふかくさのさと

(十二)

深草は京都市伏見区にある地名で、古来「伊勢物語」の「野とならば鶉となりて鳴きをらむ」の歌から、鶉や月がよくよまれる。

さて、富倉評釈は「ふかくさにかよひしころ」の詞書に着目して「兼好は若き日こゝに住む女性の許に通つてゐたのである」とされている(川瀬頭注も同じ)。これも確かに一つの受けとり方ではあるが、確証があるわけではない。「あか月きぬたうつ」の詞書に注目すると、これは「暁擗衣」の歌題であるので、深草での歌会に参加したときのものと考えられる。この点、斎藤彰氏が「草庵集」の「基任にさそはれて秋の比深草にまかりて」の詞書をひき、歌会出席のためとしているのは私見と一致する。

(2)の歌は、暁方、露のしとどに置く深草の里で衣をうっている女の夜寒の袖は、露と悲哀の涙とで濡れそぼっているだろうという意になる。「露のふかくさ」は「露深し」と「深草」とをかけている。

擗衣というのは漢詩の世界から歌題として登場するのであるが、普通、この衣をうつ女は、愛する夫を戦場に送りだして、空闊をまもる人として設定される。従つて、この歌で衣をうつの女であり、戦場に送りだした夫、あるいは訪れが間遠になつた男を思いながら悲しみの涙で袖を濡らしていることにならう。ただ、ここでは深草の里の女なので「伊勢物語」を背景にしているとみる方がよい。

深草の里という悲しい雰囲気をつたえたところ、暁方の深い露、夜の寒さ——こういった環境の中で聞えてくる砧の音は、ひとしお感慨深いものがあり、それらの思いをこめて、女の袖に涙をみている。

なお、斎藤氏は、この歌の本歌として、

衣うつをとにしれとや秋の夜のふかきあはれも深草の里

(拾玉集・五三七・慈円)

を指摘されるが、発想の偶然の一致であり、本歌と認定するのには躊躇される。

ほうりむにこもりたるころ、人のとひきて、かへりなむとするに

(3) もろともにきくだにさびし思ひをけかへらむあとのみねの松かぜ

(一七)

「ほうりむ」は京都市西郊、嵐山の東にある「法輪寺」。この寺に参籠したのは、おそらく出家後まもない時期であり、念仏修行を行っていたことであろう。

憂き世を厭い、無我の境地に心をすましているときに訪問客があった。歌の内容からすると、この人物は兼好にとつて歓迎すべき人であったようで、辞去をづけたとき、二人で一緒に聞いてさえも寂しい峯の松風を、あなたが帰られた後で、私がどんな思いで聞くか、今思ってみてください、とうたっている。かくうたう背後には、今少し帰らないで欲しいという気持や、再度の訪問を望む思いが流露している。

松風の音は蕭蕭として寂しいものとされていたので、ここでもそれを有効に持ち込んで孤独の寂しさと人なつかしさを表白している。

なお「家集」には、

さびしさもならひにけりな山ざとにとひくる人のいとはるゝまで

(二三)

と人間嫌いの心情をうたったもののほか、

人にしられじとおもふころ、ふるさと人のよかはまでたづねきて、よの中のことゝもいふ、いとうるさし

としふればとひこぬ人もかなりけりよのかくれがとおもふやまぢを

されど、かへりぬるあといとさうぐし

山ざとははれぬよりもとふ人のかへりてのちぞさびしかりける

(一二二)

と、人の訪問に微妙に揺れ動く心境を吐露した歌もある。

冬の夜、あれたる所のすのこにしりかけて、木だかき松のこの

まよりくまなくもりたる月を見て、あか月まで物がたりし侍ける人に

る人に

(4) おもひいづやのきのしのふに霜さえて松の葉わけの月を見し夜は

(三三)

詞書にある「人」は多分女性であろう。富倉評釈も「此の歌の相手は女性と見るべきである。」とする。

寒い冬の夜に、荒廃した家の簀子に尻をかけて、松の木の間から洩れてくる月を見ながら、曉までしんみりと話したあの夜の出来事を、今一度相手に想起させようとする。この夜のことが作者にとつて忘れがたかったのは、その体験が「源氏物語」(帚木)の雨夜の品定め、左馬頭の経験談——「荒れたくづれより」見ると、「この男、いたくそゞろぎて、門近き廊の簀の子だつ物に尻かけて、とばかり月を見る」の場面と類似していたことにもよう。

歌は初句にまず「おもひいづや」と相手に強く回想に身をゆだねることを希求し、以下に、軒の忍草に霜が冴え冴えと置き、松の葉を洩れてさす月光を見ながら、語りあかした、あの夜のことを、具体的に場面設定する。「源氏物語」(夕顔)に「荒れたる門の忍ぶ草繁りて見上げられたる」ともあり、(4)の歌は「源氏物語」の場面に酷似した体験を重ねあわせているとみてよい。

冬の夜の寒々とした月光が松の葉をわけてさし、霜の冴えた夜に、親しい女性と語りあった思い出は、作者にとって印象深いもので

あつたのだろう。

なお、「徒然草」の第百五段の、

北の屋陰に残りたる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せたる車の轆も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、隈なくはあらぬに、人離れる廊に、なみ／＼にはあらずと見ゆる男、女となげしに尻かけて、物語するさまこそ、何事にかあらん、盡きすまじけれ。かぶし、かたちなど、いとよしと見えて、えもいはぬ匂ひの、さと薫りたるこそ、をかしけれ。けはひなどはづれはづれ聞えたるも、ゆかし。

は、(4)の歌の体験をふまえて虚構化したものと考えられる。

三月ばかりつれづれとこもりゐたる比、雨のふるを

(5)ながむればはるさめふりてかすむなりけふはたいかくれがてにせむ

(四二)

「雨」と「つれづれ」の精神状態との結合は、古来、夥しく歌によまれてきた。「つれづれ」とこもりゐたる比」という詞書には、作者になにかおもわしくない、陰鬱なことがあり、終日、家にこもつて雨をながめて物思いにふけていたことが推測される。

歌の内容は、鬱屈した気持でみることもなく外を眺めていると、春雨がけむるように降ってかすんでいる、今日もまた、どんなに暮れがたい一日を暮そうか、さぞ退屈するだろう、となる。

実は(5)の歌の次もこの詞書を受けた、

かくしつゝ、いつをかぎりのしらまゆみおきふしすぐす月日なるらん

(四三)

の歌が続く。「かくしつゝ」とは「おきふしすぐす」を受けるが、また(5)の歌のような精神状態を受けているとも考えられ、このような状態がいつまで続くことかという歎息が聞えてくる。

この二首の歌が出家前か後かははっきりした根拠をもたないが、

いずれにしても、作者兼好の鬱屈した精神をかいまみることができて興味深い。

因みに、「春雨」を素材にした歌には、

春さめにやなぎのいとはそめかけつ花のにしきをはやもをらなん

(四五)

しばらく山わけ衣はるさめにしづくも花もにほふたもとは

(二七五)

などがある。

世中おもひあくがる、ごろ、山ざとに、いねかるを見て

(6)よの中の秋田かるまでなりぬれば露もわが身もきどころなし

(四六)

詞書の「あくがる」とは「あく離れる」ことなので、世の中を離れようとしていた頃のことと思われる。種々な苦悩を味わった末に、世を捨てようと思つて山里を彷徨していたとき、農夫が稲を刈りつついるところを見て詠じた歌であらう。

この歌の解釈として「兼好秀歌十首」(別冊國文学 徒然草必携) 昭56・6)は「この世の中に飽きて、秋の山田で稲を刈る境涯にまでなると、稲葉の露もわが身もまるで置き場所がないよ。」と解するが、作中人物をして、「稲を刈る境涯」になつたとするのはいかがであらうか。

「秋」に「飽く」をきかせていることは確かであるが、その掛詞を利用して二つの現象を表現していると思える。即ち、今まで露は稲の上に置いていたが、刈りとられてしまつたら、もう露の置きどころがない。それと同じく、私も世の中を厭つてはみても、身の置きどころがないということである。「露もわが身も」と表現しているのは、あのはかない露と同じような自分のたよりない身をもこめているのであらう。

兼好が見ていた稻刈りの田は彼の所有していた土地だったという見方もできるが、確証はない。

ともかく、この歌と詞書には鬱々とした作者の心情が溢れており、やる方なき我が身に焦燥しているさまがうかがえる。

なお、風巻景次郎氏は、この(6)の歌をもつて、兼好の出家が後二条帝崩御に殉ずるものでないことの例証の一つにあげられている。

(侍従中納言殿にて人々題をさぐりてうたよみ侍りしに)

薄暮帰雁

(7) ゆきくる、くもちのすゑにやどなくばみやこにかへれ春のかりがね

(六〇)

「ゆきくる、」は「行き暮るる」で、雁が北へ帰ってゆく途中に日が暮れることを意味する。従つてこの歌は、飛んで行き暮れた雲路の末に、もし宿がなかったならば、春の雁がねよ、再び都に帰ってきなさい、という意になる。

二条良基の「近來風体抄」には「其比は頼慶兼三人何もく上手といはれし也」とし、「兼好はこの中にちとおとりたるやうに人々も存ぜしやらむ。されども人の口にある歌どもおほく侍なり。都にかへれ春のかり金、此歌は頼も慶もほめ申き」とあり、この歌が頼阿や慶運から賞美されたとする。おそらく、侍従中納言(為藤)家での探題歌会の際に披露された歌であり、列席の歌人達が讃辞をもつて迎えた歌であつたろう。

それにしても、この歌が賞美されたのはなぜであつたろうか。古来、帰雁といえは、春の歌材として多くよみがれてきたもので、雁が北に帰るのを見て、

はるがすみたつをみすててゆくかりは花なき里にすみやならへる

(伊勢・古今集・春上・三二)

などと惜別の情をこめてうたい続けてきた。兼好はその雁との惜別

の悲しさを背景にして、雲路の末に宿がなければ「みやこにかへれ」と呼びかけて、新しい発想をうちだしているとともに「薄暮帰雁」の歌題にもかかつていたためであろう。現代人の鑑賞眼からみると、少し理づめになっているが、当時の歌壇では、このような発想の歌が迎えられたのであろう。帰雁をよんだものには、他に、

又もこむ秋こそいとったのまるれとまとしなき春のかりがね  
(二五一)

ほりかはのおほいまつちぎみを、いはくらの山庄におさめたてまつりしに、又の春、そのわたりのわらびをとりて。申つかはし侍し  
(8) さわらびのもゆる山辺をきて見ればきえしけぶりの跡ぞかなしき

(六七)

この歌は「統現葉集」(巻八)にも、次の延政門院一条の返歌とともに収録されている。その詞書は「堀川の内のおほひまうちぎみ身まかり侍にけるを、いはくらにおさめ侍て、又のとしかの山のわらびをとりてつかはしける」とある。「ほりかはのおほいまつちぎみ」とは堀川具守(正和五年正月十九日没・享年六十八歳)で兼好の旧主である。その山荘が山城国愛宕郡岩倉にあった。具守の一周忌に当って、岩倉のあたりの早蕨をつんでつかわした相手は延政門院一条で、

見るまゝになみだのあめぞふりまさるきえしけぶりのあとのさわらび

(六八)

の返歌をしている。この贈答歌は従つて、具守の死の翌年の文保元年春のころの詠歌となる。

(8)の歌は「もゆる」に「萌ゆる」と「燃ゆる」をかけ、さらに、「きえる」「けぶり」が「もゆる」と縁語関係になっており、早蕨のもえでた山辺に来て(具守を火葬にしたその)煙も消えてしまつ

た跡を見ると、しみじみと悲しみを催すると詠じている。詞書を含めてこの歌を味読するとき、春の山辺に立ち、早蕨の萌えてた原を見て、主君のことを想起して、しみいるような悲しみにひたっている作者の心情が素直に響いてくる。

なお、この歌は、富倉評釈、川瀬頭注、共に指摘がないが、「源氏物語」の早蕨の巻で、中君が光源氏に送った、この春はたれにか見せむ亡き人のかたみにつめる峯のさわらびの歌を念頭において詠作されたとみてよい。

早蕨に取材したものは、この他に、

がある。

(一一二)

心にもあらぬやうなることのみあれば

(9) すめばまたうき世なりけりよそながらおもひしまゝの山ざともがな

(八一)

この歌は「新千載集」(雑下)にとられている。富倉頭注によると「吉野拾遺物語」には、兼好出家後しばし木曾は霧原山に庵を結んだが、一日国守の衆を率いて来り狩獵して喧噪を極めたのにあい詠んだ由を伝えているが信じられない」とする。詞書の「心にもあらぬやうなること」とは、具体的にわからないが、出家する以前に思えがいていたことが、どれもうまくゆかないあせりがあつてのことだろう。「やうなることのみ」には八方ふさがりの絶望感がある。また、歌本文の、「よそながらおもひしまゝの山ざ」とは出家する以前に想いえがいていた理想的な山里である。だからこの歌は出家直後の頃のものともてよい。

世をのがれて、いざ山里に住みついてみたが、やはりここも憂く辛いところであつたことだ、以前から想いえがいていた通りの山里

があつてほしいものだというのが歌の意である。「家集」では、この詞書のもとに、

(八二)

山ざとかきほのまくずいまさらにおもひすてにし世をばうらみじ

(八三)

の二首が続くが、八三番の「いまさらにな」には、出家しても、完全にはこの世のことが忘れきれない執着心がうかがえる。

この一連の三首からは、出家後の兼好の心情を察することが出来て興味深い。

(五月廿日ころ、御子左の中納言どの、庚申に、螢火秋近)

(10) とぶほたるまだつげこさぬくもるよりゆきかふ秋と風やふくらむ

(九七)

「御子左の中納言」は、二条為定のことと、庚申の夜に彼の邸で歌会を催したときに提出した歌である。

この歌は、富倉評釈も指摘するように、「ゆきかふ秋と風やふくらむ」が、

夏と秋と行きかふそらのかよひぢはかたへすゞしき風やふくらん

(窮恒・古今集・夏・一六八)

の歌を念頭においている。

「まだつげこさぬ」とは飛んでいる螢が、秋の到来を告げてこないことである。それでもなお、空の通路より夏と秋がゆきかうとして、涼しい風が吹きはじめているだろうと推測している。歌題が「螢火秋近」なので、当然、螢の火が秋の近いことを知らせることになるが、この発想は「伊勢物語」の、

(第四十五段)

などから生まれたものであり、かつ、(10)の歌も「とぶほたるまだつげこさぬ」からみて、この歌を念頭に置いていたとみてよい。

ほのかな光を点滅させながら乱れ飛ぶ螢は、まだ秋の到来を知らせないが、もう秋はそこまできて、涼風が吹いているだろうと思いやっている。秋の到来を待ちわびる気分が古歌を媒介として想像を存分に働かせて一首をつくりあげている。

なお、螢に取材した歌は他に一首

とぶほたるなぞやうき世のにこり江にかけをかくさでもえわたるらん

がある。

(二七七)

(民部卿殿にて、をの／＼歌よみて、ほめそしることありしに)

五月雨

(11)もがみ河はやくぞまさるあまぐものほればくだる五月雨の比

(一一六)

ここの民部卿も二条為定を指す。彼の邸で褒貶歌を提出したときの歌である。この歌はいうまでもなく、

もがみ川のほればくだるいなふねのいなにはあらずこの月ばかり

(古今集・東歌・一〇九二)

を本歌とする。本歌は「のほればくだる」という反意語連鎖表現に興味があつて著名な歌となつていているが、ここでは稲をつんだ舟が最上川を上下するさまをうたっている。これに対し(11)の歌は、雨雲が水上にのぼったかと思うとすぐに、雨水が降って増水して下つてくることに転化している。

従つて一首の意は、

最上川では、雨雲が水上に上ったかと思うやいなや、早くも水蔭をまして川をくだつてくる五月雨の頃であることだとなる。

この歌は「藤葉和歌集」(巻二)にも入集している歌であるが、

全体に力感的なリズムがあり、五月雨の頃の最上川の水量のすばやい変化を巧妙にとらえている。

なお、富倉評釈は、この(11)の歌が、芭蕉の「奥の細道」所載の句「五月雨を集めて早し最上川」の母胎をなすものとして有名であるとしているが、山本健吉氏は、「最上川」「早し」「五月雨」の三語の符合から、よく兼好のこの歌を引き合いにだすが、両作品の關係を考える必要はないとされる(芭蕉)。

(民部卿にて、をの／＼歌よみて、ほめそしることありしに)  
寄湖恋

(12)心をぞこほりとくだくすはのうみのまだとけそめぬ中のかよひち

(一二五)

この歌も(11)と同様、為定卿家での褒貶歌会の詠歌である。

「すはのうみ」は信濃の「諏訪湖」であり、和歌にも、  
諏訪の海の氷の上のかよひちは神のわたりてとくる也けり

(堀川百首・顯仲)

などはじめ、氷のはった湖としてよまれることが多い。「心をぞこほりとくだく」とは、恋情に悩んで心をあれこれと砕くことを、氷を砕くことに関連付けている。

この(12)の歌は「寄湖恋」であるので、諏訪湖の氷がまだ解けはじめないように、二人の仲も心を千々に砕いても、まだ、うまく解け合うことができないうとの恋情をうたっている。心を千々に乱すことを「諏訪湖」の氷の関連で「こほりとくだく」とし、二人の仲がしつくりしないのを「まだとけそめぬ」としたところに斬新な表現がみえる。「くだく」「とけそめ」は「氷」と縁語関係にある。

また「中のかよひち」は、勅撰集では、

むなしくして月日は越えつ逢ふ事をへだつる閨の中の通路

(為道朝臣・新千載・恋三・一二九八)

関守の打ちぬる程と待ちし夜も今は隔つる中のかよひ路

(侍従為敦・新後拾遺・恋四・一一七七)

ほかがあるが、どの場合でも、うまくうち解けて通える路とはなっていない。

秋の夜

○おぼろのし水をたづねて

(13) おほはらいづれおぼろのし水ともしられず秋はすめる月かな

(一三四)

「おぼろのし水」は、山城国愛宕郡大原村にある歌枕で、古来、水草るしおぼろの清水底すみて心に月の影はうかぶや

(素意法師・後拾遺・雑三・一〇三七)

程へてや月もうかばん大原やおぼろの清水すむなばかりに

(良通法師・後拾遺・雑三・一〇三八)

などと、月をひきあいに出されることが多いが、(13)の歌でも月がでている。

歌は、大原に来て見ると、秋の月が澄みわたって、どこも朧でないように、いったいどこが朧の清水かわからない景を描いている。

この(13)の歌の趣向は、「おぼろ」といえば春の景物であるのに、尋ねて行つた時がちょうど秋の月の澄みわたった夜であつたので、どこが「おぼろの清水」かわからないと発想したところにある。詞書にわざわざ「秋のよ」と追加したのは、この趣向を明確化させるためであつたろう。また、「おぼろ」と「すめる」も対照的にもちこんでいる。

詞書によると、秋の夜、兼好は大原村にある歌枕の朧の清水を尋ねて行つたらしい。しかし、彼の心をとらえたのは、大空から澄みきつた光をなげかける月光であつた。この歌がよまれたのは、出家の前か後か判然としないが、前の二首が、

山ざとははれぬよりもとふ人のかへりてのちぞさびしかりける

(一三二)

あらしふくみ山のいほのゆふぐれをふるさと人はきてもとはなん

(一三三)

と出家後の歌のようなので、(13)の歌も出家後の可能性が強い。

(藤原行朝すゝめ侍し、かしまの杜のうた)

(14) 風さやぐ岡のふゆくさけきのまにうづもれはて、雪はふりつ、(一三八)

詞書でいう藤原行朝は二階堂貞綱の子で、左衛門尉、信濃守、從五位下、正中三年(一一三二六)出家した人物。「かしまの杜」は、茨城県鹿島町宮中にある大杜である。

この歌は時間の経過を念頭において味読する必要がある。「風さやぐ岡のふゆくさ」とは岡に茂っている枯れた冬草を風が吹きゆるがすことであり、この状態は雪の降りはじめた今朝まで作者の感覚でとらえられていたのである。その冬草が、今朝降りはじめた雪のためにすっかり埋もれてしまったとうたう。「けさのまに」と表現するとき、ほんのわずかな時間で埋もれたことへの驚きがあり、また一方ではかなり激しく降ってくる雪を想いえがらせる。最後を「雪はふりつつ」と現在も継続して降り続いているように表現しているのも力動感がでている。

この歌はまた、「風さやぐ」と昨日までの冬枯の動きと「うづもれはてし」の静かさが時間の経過によつて対照されている。

「うづもれはて、」の表現をとり込んだ勅撰歌には、

雪をれの音だに今朝は絶えにけり埋れ果つる峰のまつ原

(藤原隆祐・続千載・冬・六六七)

訪ふ人をまつと頼みし梢さへうづもれはつる雪のふる里

(津守国助・続千載・冬・六六八)

などがある。

先坊御時、御歌合につかうまつりし五首、元亨三年の事にや



(15) 秋ふかき霜をきそふるあさぢふにいくよもかれずうつころも哉

(一五七)

先坊は邦良親王を指す。後二条天皇皇子。文保二年(一一三二)三月立坊、嘉暦元年(一一三二)三月二十日没。「兼好自撰家集」では、他に「正中二年、春宮よりうためされ侍しに」(一一〇八)と「前坊御まへに月の夜権大夫殿<sup>な</sup>さぶらはせ給て」(二七八)の二箇所が登場する。

「あさぢふに」とは、川瀬頭注が指摘しているように「あさぢふのはえたれた宿に」という認定である。秋もしだいに深くなるとともに、霜が置きはじめた浅茅のはえた荒れた宿からは、幾夜も幾夜も絶え間なく衣をうつ音がするという意である。

この歌はまず、晩秋の霜置く頃という季節の設定が哀感をかもしだしている上に、さらに浅茅の茂った荒れた宿をだし、そこに砵をうつ音を点描して、静寂な悲しみを響かせている。擗衣の伝統からすれば、衣をうつているのは女性であり、男のことを思っていることとみてよい。

秋の霜夜の寒さの中に響く槌の音、それを幾晩も続けているところに、聞くものをしんみりとさせる雰囲気がある。まるで、物語の一場面を切りとってきたかのような歌となっている。

ひとり花のもとにたづねいりて

(16) 見ぬ人にさきぬとつげむ程だにもたちさがたき花のかげかな

(一六二)

詞書と和歌が融合し、平凡ではあるが、しんみりした味がある。

「ひとり花のもとにたづねいりて」という詞書には、桜の花を独りで見たこと、しかも「たづねいりて」の表現には山桜の花を探して、山深くわけ入った行動がしのばれる。出家後の草庵の独り住みの或る日の行動を示しているようにも思われる。

作者は山にわけ入って、すばらしい桜の花を尋ね当て、この美しい花を見ていると、この桜を知らない友にも告げ知らせたい心持になつてきた。しかし、それを告げて行く、ほんのわずかな間でも、

桜の木のもとを立ち去りたいのは、花の美しさのとりこになつてゐるためでもあり、また、自分がその場を少しでも離れてゐる間に、風に吹き散らされそうだという危惧の念からという二重の原因が考えられる。富倉評釈は「見ない人に咲いたと告げる間すらもあまり美事なので立去さるにしのびない花の下であるわい」とする。

古来、桜の花の美しさをめぐる歌は夥しくあるが、花を見ない人に告げ知らせるはんのわずかの間でも立ち去りたいと発想したのは珍しく、作者の手柄となつてゐる。

孤独な生活が続けている身で、山桜の花を見つけ、知らない人に知らせたい思いをおさえつつ、うつとりと立ちつくす作者の姿が彷彿としてくる歌である。

御子左中納言家にて、春風

(17) みなと河ちりにし花のなごりとやくもの浪たつ春のうら風(一六七)

「御子左中納言」は既出の二条為定。「みなと河」は摂津國武庫郡を流れる川。「千載集」頃から歌によまれるようになった。

作者が散つた花を詠ずるのに「みなと河」を選んだのは、ちる花のながれていづるみなとがはいづくか春のとまりなるらん

(珍誉和歌四)

の歌にもみえるように、散つた桜の花びらの行きつくところを設定したかったためであらう。

また「くもの浪たつ」という奇抜な表現があるが、これは、天の海に雲の波立ち月船星の林に漕ぎ隠る見ゆ

(万葉集・巻七・一〇六八)

の表現をとり込んだものである。「花の浪」とせず、「くもの浪」としたのは、桜の花を白雲に見立てていたことが前提となっているのだから。

歌の意は、ここ湊河には吹き散った桜の花の最後の名残りとしてであろうか、春の浦風に吹かれて、雲が白い浪のように立っていることだ、となろう。

川の白い飛沫、そのなかに白い花びらがいつしよになって浪を立てているのである。歌題は「春風」だが、ここでは、風は桜の花を散らすとともに、浪を立てさせるものとして作用している。

(建武二年、内裏にて千首歌講ぜられしに、題をたまはりてよみてたてまつりし七首) 秋天象

(18) よもすがらそらく月のかげさえてあまの河せや秋こほるらむ

(一一七二)

建武二年は後醍醐天皇の年号であり、この千首歌は建武中興の御代を祝して催されたものである。従って、兼好もこの七首提出歌の「春殖物」では、

久方のくもるのどかにいづる日のひかりに、ほふ山ざくらかな

(一一七〇)

と、のどかな光に照り映える山桜を詠じ、また「雑地儀」でも、せり川のちよのふるみちすなほなるむかしの跡はいまやみゆらん

(一一七六)

と詠じて御代を祝している。

さて、(18)の歌であるが、「あまの河せ」とは、

忍びあまりあまのかはせにことよせんせめては秋を忘れだにすな

(正二位経家・新古今・恋二・二二九)

にも用例があるように、銀河の瀬のことである。一首は、一晚中、空を渡って行く月の光が寒々とさえわたうていて、天の河の河瀬は

まだ秋なのに、すでに氷っていないだろうかとなる。秋の空に澄みわたる月光を冴え冴えと寒い感触でとらえたので、天の河瀬が氷っているだろうかという奇抜な発想をうんだのである。

この歌は、一晚中、秋の空にすむ月を眺めているという時間の経過があり、そこから天空の河瀬に思いをはせている。「秋こほるらむ」としたところに意外性がこもり、それによって、秋の月光のさえているさまが強調されることになる。

(ある人のもとにて、をのく五首のうたよみしに)

野外冬月

(19) 冬がれはのかぜになびく草もなくこほるしも夜の月ぞさびしき

(一一八〇)

詞書の「ある人」とは「草庵集」の同歌題歌の一致により(七四一・七六七・九七三・一〇五四)、二条為定とみてさしつかえない(「草庵集」には、「御子左大納言家五首」とある)。

一首の歌の世界は、冬枯れとなった野原には野風になびく草さえもない、そこに氷りつくような霜夜の月が寂しい光をなげかけているとなる。「こほるしも夜」の措辞は、

網代もりさぞ寒からし衣手のたなかみ河もこほる霜夜に、

(前大納言爲家・続古今・冬・六三七)

にもみえる。

草木も枯れた荒寥たる野原に風が吹いている——この景はさびさびとした世界である。しかもこの歌では、寒い霜夜であり、荒寥たる野原に月光が落ちていくという、まさしく冬の月の寂寥たる寂しさ、冴えた空気とともに染み込んでくる世界をつくりあげている。下二句の「こほるしも夜の月ぞさびしき」は、あまりに感情をあらわにだしているが、上三句の「冬がれはのかぜになびく草もなく」の表現は優れている。中世人の讚美した寂寥美をとらえた一首とし

て味読すべきであらう。

なお、川瀬頭注は第五句を「月ぞさむしき」と誤読している。

### 海のほとりのちどり

(20) 難波がたみちくるしほに風たちてあしの葉さやぎちどりなくなり

(一八二)

この歌も前の(19)の歌と同じく「ある人のもとにて、をの／＼五首のうたよみしに」の内の一首である。頓阿はこの「海辺千鳥」の歌題で、

松にふくしほ風さむみ庵原やみほの沖津に千鳥鳴くなり(七四一)と詠じている。

(20)の歌の光景は明確である。難波がたの潮が満ちてくるにつけて、風が吹きおこり、芦の葉をさやさとそよがせているが、そのそよぎの中で千鳥が鳴いている景である。

潮が満ちる、風が立つ、芦がそよぐ……、こういった一連の連鎖反応としての動きをとまなっているとともに、聴覚的には芦の葉のさやさとという葉ずれの音と千鳥の哀韻をこめた鳴き声が響いている。全体に調べが力強く、万葉調のようである。

桜田へ鶴鳴き渡る年魚市濁潮干にけらし鶴鳴き渡る

(高市黒人・万葉・卷三・二七二)

といった著名な歌や、

夕月夜潮みちくらし難波江のあしの若葉にこゆるしらなみ

(秀能・新古今・春上・二六)

などの歌を想起させる。

あさぐもりのそらとおもしろし

(21) 朝まだきくもれるそらをひかりにてさやけくみゆる花のいろ哉

(一九〇)

「あさぐもりのそら」に情趣をみいだしているのは、作者の特異な美意識を示しているとみてよい。

歌の内容からすると、空が曇っているのではなく、朝まだ早いので霞や霧などがかかって曇っているらしい。そういった空のもとで見た桜の花に焦点をしばっている。「くもれるそらをひかりにて」とは奇妙な表現だが、富倉評釈では「曇っている空のかすかな明るさで」と解している。従って、この一首は、朝まだ早いので空は曇っているが、その空のかすかな明るさによって、桜の花がさやかにみえることだと解される。「くもれる」と「さやけく」とは対照的に表現されている。花の白さが朝の太陽に照らされているのではなく、薄曇りの空のなかに、白い花の色のあざやかさがとらえられているのである。「玉葉集」にある、

春はたゞくもれる空の曙に花はとほくて見るべかりけり

(従三位親子・春下・一九八)

の歌が連想される。

(遍智院宮よりめされしに、よみてたてまつりし歌)

(22) さても猶よをうの花のかげなれやのがれていりしをの、山ざと

(二二一)

遍智院宮とは、原本に「聖尊法親王」の朱書の肩書きがあるように、後二条天皇第三皇子。仁和寺門跡。建徳元年(一一三七〇)没。享年六十八歳。

「よをうの花のかげ」の「う」には、「卯の花」と「憂し」をかけている。「さても猶」には、心の中で、ある種の期待感をもっていたものが、案にはずれた感情を示す。この場合は、世を逃れて小野の山里に住みつければ、世の憂さから逃れられると思っていたのに、それがかなわず、なお憂さはつきまといっているというのである。

一首は、世の憂さを逃れて小野の山里に入ってはみたものの、そ

こも憂きところなのか、卯の花が咲いていることだという意になる。

「をの、山ざと」は普通名詞ととつてもさしつかえないが、富倉評釈・川瀬頭注、ともに固有名詞ととり、山城国愛宕郡小野郷とする。また、安良岡康作氏は「をの、山ざと」を兼好が山城国山科小野庄の田地一町を買いとつたという大徳寺文書と関連付けておられる（「兼好の遁世生活とつれづれ草の成立」文学・昭33・9）。

この歌と近似した心境をうたつたものは、すでに評釈したすめばまたうき世なりけりよそながらおもひしまゝの山ざともがな

にもみてとれる。

(八一)

いくら世の憂きから逃れようとしても、現世においては逃れきれない。そういった焦燥感ともあきらめともつかぬ心情を吐露している。晴の歌として聖尊法親王に提出した歌ではあるが、その点、個人的な感情を色濃く残した歌であり、当時の作者の苦悩の一端をかいまみることができる。

(遍智院宮よりめされしに、よみてたてまつりし歌)

(23) たまぐらの、べのはつしもさゆる夜のねてのあさけにのこる月かげ

(二一八)

「ねてのあさけ」は「古今集」の大歌所の歌

水ぐきのをかのやかたにいとあれとねてのあさけのしものふりはも

(一〇七二)

に依拠している。「古今集」の歌は、岡の屋形で妹と我とが共寝をして、その夜明けの霜を思いやっているが、(23)の歌は「たまぐらの、べのはつしも」とあるので、手枕をして野辺のあたりに一夜を明したと考えられる。その夜は初霜が置いて寒い夜であったとして、一夜寝てのあけがたに残っている月を見ているのである。

この歌で問題となるのは、初霜が置いて寒い夜に手枕をして、一

夜寝たあけがたの空に残っている月を見たときの感情である。おそらくこの残月は寒々として空に浮んでいたのであろうが、一方では昨夜の種々な思いをこの月にみいだし、寒々とした月光が、眺める人の胸に染みいったであろう。全体に感情をまじえず、叙景をうきたたせているが、その背後に、こまやかな艶の気分がただよっている。

(しはすのつごもり、あはれなることどもおもひつづけて、うちもまどろまぬに、かねのをといと心ぼそし)

(24) おどろかすかねのをとさへき、なれてながきねぶりのさむるよもなし

(二二七)

詞書自体からして、しんみりした気持を伝えている。時は十二月の晦日であり、この一年にあった「あはれなること」どもをあれこれと回想しながら、作者は寝つかれずに悶々としている。そこへ諸行無常の理を知らせるかのように鐘の音が響く。まんじりともせず、その音を心細く聞いている作者の孤影が彷彿としてくる。この詞書は、(24)の歌の前の

春ちかきかねのひゞきのさゆるかなこよひばかりとしもやをくらんと二首にかかっている。

(二二六)

(24)の歌の「おどろかす」は眠りをさますことであるが、ここは「ながきねむり」（無明長夜）とあるので、豁悟の気持も含んでいるよう。川瀬頭注は「さむるよもなし」の「よ」に夜と節がかけるとする。

「おどろかすかねのをとさへき、なれて」は、目をさませる鐘の音を聞きなれてしまつてと、現実生活をうたつているとともに、一方では鐘の音が諸行無常を知らせるものとしても働いている。

従つて歌の意は、この世の諸行無常を知らせて豁悟をうながす鐘の音にも、すっかり聞きなれてしまつて、無明長夜の迷いの夢から

さめることもないとなる。この歌は出家後の歌だろうか。来し方行く末を「あはれ」と思いつつ、まんじりともせず鐘の音を心細く聞いている。迷いの夢は、深く作者の心をとぎし、不安をかきたててゆくのである。

あはれなる夢を見てうちをどろきたるに、かたるべき人もなければ

(25) さめぬれどかたるともなきあか月のゆめのなみだに袖はぬれつ、

(二三〇)

この歌も詞書を含めて味読すると、しみじみとした心情が伝わってくる。

作者は夜中に「あはれなる夢」を見て目を覚ましたが、そこにはその哀れな夢を語るべき友は一人もいなかったという。この体験は、おそらく、出家後の草庵での独り住みの頃にあったことであろう。

哀れな夢を見て、ふと目を覚ました、明方にはまだ間があつて部屋は薄暗い、そこにはその夢を語る友もいない、ただ、夢を見て流した涙で袖が濡れているばかりであるとうたう。「ゆめのなみだ」という圧縮表現が生きている。

ここで抽象的に言っている「あはれなる夢」とは、具体的にどんな内容の夢であつたのか。実は、(25)の歌の次も、この詞書のもとによまれた、

見ずもあらでゆめの枕にわかれつるたまのゆくゑはなみだなりけり

(二三一)

の歌である。この歌の富倉頭注は「逢わないという程でもなく、さらばとて逢つたという程でもない、夢の中のはかない逢瀬に、目ざめた今、我が魂はただ涙にくれるばかりである」と解する。すると、夢は恋しい人との逢瀬と離別であつたと考えられる。

(25)の歌で「ゆめのなみだに袖はぬれつ、」には、恋しい人との

かない別れで流した涙がこめられているようである。  
ともかく、この歌からは、詞書とともに味読するとき、隠遁者の身をきるような孤独感が脈々と響いてくる。

なにごともしばしばかりの世中をいく程いとふわが身なるらん

(26) うきこともしばしばかりの世中をいく程いとふわが身なるらん

(二三三)

「ほどあらじ」とは、長いことではないということ。ここは種々の憂きことが、作者の身にまわりついている現実にあつて、どんなことも長くはないと自から慰撫した姿勢がある。

歌はこの詞書の理をうけて、憂く辛いと思うことも、ほんのしばばかりの世の中であるのに、自分はどうして、これほどまでに世を厭わしく思うのであらうかとなる。

色々な憂きことに苦悩する自分を一步步離し、はかない世の中にあつては、この憂きことも、ほんのしばしのことだ、そんなに深刻に悩まなくてもよいと自省しているのである。

しかし、このように自分を納得させようとした作者ではあるが、どれほど諦観しえたかは全く疑問である。「なにごともしばあらじ」と自省したときには、その通りだとは思ふものの、やはり現実の苦悩から完全に逃れきることはできなかったであらう。そこに焦燥の心情が流れている。

この歌は出家前とも後とも考えられるが、この歌の次が、

いづかたにも又ゆきかくれなばやとおもひながら、いまは身をこゝろにまかせたれば、中／＼をこたりてのみぞすぎゆく  
そむく身はさすがにやすきあらましに猶山ふかきやどもしそがず

(二三四)

と出家直後の歌なので、この一連の歌は出家後の心理を詠じたものかもしれない。

(春月)

(27) さやけさはをとのみこそきこゆなればそたに川の春のよの月

(二三九)

「ほそたに川」に対して、川瀬頭注は「ほそい小さい谷川の意で、どことした地名ではなからう」とされたが、ここはやはり、まがねふくきびの中山おびにせるほそたに川のをとのさやけさ

(古今集・大歌所御歌・一〇八二)

を本歌とみて、備中国の細谷川とみたい。「をとのみこそきこゆなれ」は、河音だけが聞こえる意と有名であるとの二重の意をきかせている。

従って一首には、細谷川の上にてた春の夜の月はおぼろにかすみ、河音だけがさやかに聞こえることよという意と、細谷川といえは、河音がさやかだとして有名であるが、ここの春の夜の月はおぼろにかすんでいる意がこめられている。

「さやけき」河音と、それと対照的な、おぼろな春の月をだしているのである。この歌の一首前も同じ「春月」の歌題であるが、よもすがらかすめる月の影ながら行かふくもやはれくもるらん

(二三八)

と、かすんだ月を詠じている。このイメージが次の(28)の歌にも残像として働いている。

おもひをのぶ

(28) かすならぬみの、を山のひとつ松ひとりきめてもかひやなからん

(二四三)

「おもひをのぶ」はそのまま「述懐」ということである。歌題からして、すでに歎きの表白の姿勢を示している。

「かすならぬみの、を山」は「かすならぬ身」と「美濃のを山」がかけられている。また、「みの、を山のひとつ松」は「ひとり」

を導入する序の働きもしている。「みの、を山」とは、美濃国南宮山のことである。「ひとりきめても」とは、独り悟っているもの意。

一首は、このつまらない我が身が、あの美濃のを山のひとつ松のように、独りだけ悟っている、なんのかいもないだろうという意となる。ここでは「さめる」を迷いの夢から覚めるとしたが、別の見方をすれば、世の濁りにしまないで、独り超然としているともとれる。いずれにしても、もののかずでもない自分独りが覚めている、なんのかいもないという気持―悟りの境地に向おうとする手前で述懐しているのである。

この歌は、

思ひいづやみののを山のひとつ松契りしことはいつも忘れず

(伊勢・新古今・恋五・一四〇七)

を念頭において詠歌されている。また、「おもひをのぶ」の二首目は、

たえぬるか身はうき舟のつなでなわひく人もなきよをわたりつ、

(二四四)

で、やはり、とりたててくれる人もない自分を欺いている。

月にむかひておもひつゞけし

(29) 風そよぐ竹のは山の秋の月のどかにすまぬ世こそしらるれ (二四六)

月に向って種々なことを思い続けたという詞書自体、ある夜の孤独な作者のシルエットを彷彿とさせるものがある。

川瀬頭注は、初句を「風よそぐ」として、「風がよそよそと音をたてる」としているが、これは「風そよぐ」の翻刻誤りからくる誤解である。

「風そよぐ竹のは山」は、風にそよぐ竹と、竹のは山をきかせている。「竹のは山」に対して、富倉評釈は「山城にある歌枕。深草大路長講寺橋の西二町餘にある」とするが、確かに、

ふかくさやたけのは山のゆふぎりに人こそみえねうづらなくなり

など数例がある。また、「のどかにすまぬ」には「澄む」と「住む」がかけてある。

一首は、風にそよぐ竹のは山の秋の月を見ると、澄みわたってばかりいられないように、のどかに住んでもいられない世であることが思い知られることとなる。

自然現象を見て、我が身の境遇を思いあてるといふより、のどかに住んでおれない思いが痛切なために、自然の現象をも、それにひきつけて見てしまう詠歌態度である。

ゆきふる日、ひえの山にのぼりて

(30)のこりつるまきのしたみち猶たえてあらし吹しくみねのしら雪

(二七四)

兼好は雪の降りしきるなかを、比叡山に登って行った体験を持つ。勿論、延暦寺に関連することで、仏道修行のためであろう。

「のこりつるまきのしたみち」とは、雪にとざされることなく残っていた横の下道のことである。横の下道は、例えば、

枝かはす梢に雪はもりかねて木のしたうすき横の下みち

(権大納言家定・玉葉・冬・九六四)

の歌にみられるように、枝が茂っているので雪がもりかねて積りにくいものとしてある。だから最後まで雪にとざされずに残っていたのであるが、(30)の歌では、その道まで雪が降り積って絶えてしまったとする。そこに積雪のすごさと吹雪の激しさが示されている。

一首は、雪にとざされないで最後まで残っていた横の下道までも、雪が降り敷いてとだえてしまい、雪をともなつた嵐が、激しく峯の辺に吹いている景となる。

「猶たえて」というところに、全山雪に埋めつくされた状況をだ

し、「あらし吹しくみねのしら雪」と体言止めにしたところに、峯を吹きわたる吹雪の激しさが窺える。

(昭和57年3月15日受理)